

令和3年度 大阪府障がい児療育等支援事業 専門研修会

「ライフステージ」から考える 障がい児の支援

神戸大学大学院保健学研究科
篠川裕子

今日の内容

1. ライフステージと発達課題
2. 障害のある対象児・者と発達課題
3. 各ライフステージでの発達課題と支援

はじめに

この研修会で伝えたいこと

「子どもは大人になる」 ということ

将来を見据えた継続的な支援が不可欠

1. ライフステージと発達課題

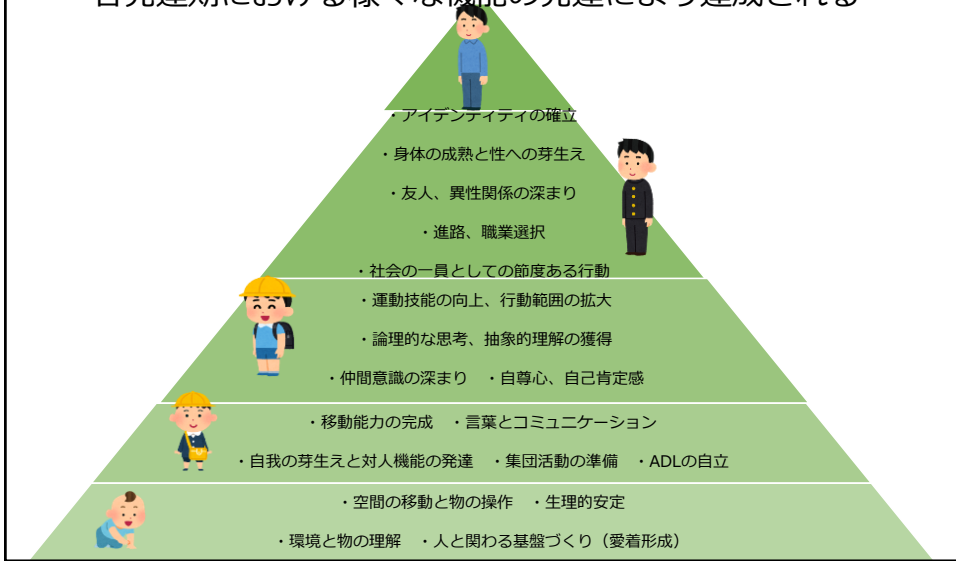
a. ライフステージとは？

発達期		期間	特徴
新生児期		出生から4週間	主に家庭で養育される期間
乳児期		新生児期から生後1年	
幼児期	前期	乳児期から3歳まで	保育園など、家庭以外の生活環境が広がる期間
	後期	3歳から6歳まで	
学童期		6歳から12歳まで	義務教育の期間
青年期	前期（思春期）	12歳から18歳まで	義務教育および高等教育の期間
	後期	18歳から22歳まで	
成人期		22歳から65歳まで	社会人として独立する期間
高齢期		65歳から	退職後の期間

b. 各ライフステージの発達課題

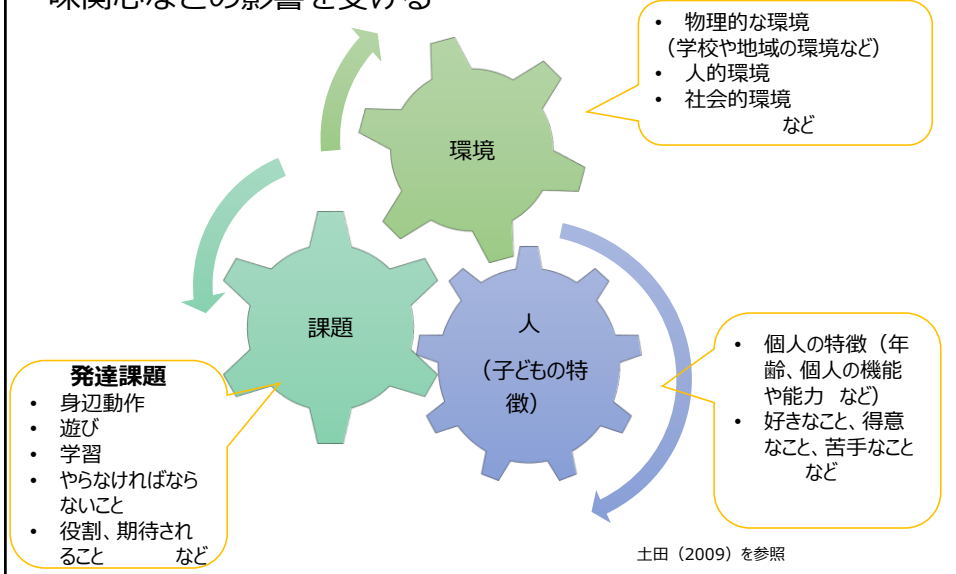
発達課題

- ・ 各発達期に達成される課題で、次の発達期につながるもの
- ・ 各発達期における様々な機能の発達により達成される



c. 発達課題の変化

発達課題は、子どもを取りまく環境と子どもの年齢、興味関心などの影響を受ける



d. 各ライフステージの環境と発達課題

	環境	発達課題
乳児期		<ul style="list-style-type: none"> 空間の移動と物の操作 生理的安定 環境と物の理解 人と関わる基盤づくり（愛着形成）
幼児期		<ul style="list-style-type: none"> 移動能力の完成 言葉とコミュニケーション 自我の芽生えと対人機能の発達 集団活動の準備 ADLの自立
学童期		<ul style="list-style-type: none"> 運動技能の向上、行動範囲の拡大 論理的な思考、抽象的理解の獲得 仲間意識の深まり 自尊心、自己肯定感
青年期		<ul style="list-style-type: none"> アイデンティティの確立 身体の成熟と性への芽生え 友人、異性関係の深まり 進路、職業選択 社会の一員としての節度ある行動

発達課題はそれぞれの環境に適応するために必要となる課題であり、各ライフステージによって変化する

2. 障害のある対象児・者と発達課題

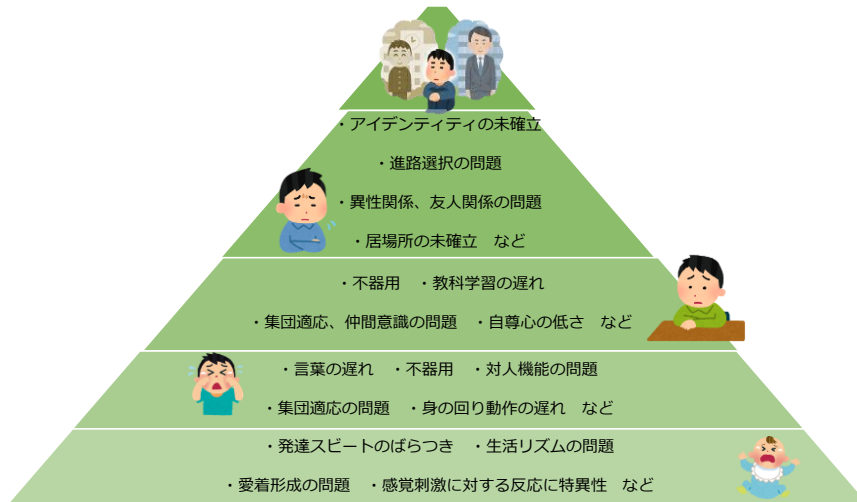
a. 障害のある対象児・者の特徴

できることと難しいことの差が大きい

日常生活活動	遊び・余暇	学習
<ul style="list-style-type: none"> スプーンや箸の使い方が下手 着替えや排せつに介助が必要 など 	<ul style="list-style-type: none"> 同じ遊びを繰り返す 遊びが長続きしない など 	<ul style="list-style-type: none"> 得意不得意な科目に大きな差がある 教科学習の遅れ など

姿勢・運動 手の操作	感覚	知的・視覚認知 機能	言語・コミュニ ケーション	情緒・行動	社会性・対人関 係
<ul style="list-style-type: none"> 身体の使い方が下手 姿勢が崩れやすい 運動発達の遅れ 道具の操作が下手 手の発達の遅れ など 	感覚過敏や感覚刺激に反応しにくいことがある（耳ふさぎする、ある感覚刺激を強く求める など）	<ul style="list-style-type: none"> 知的発達の遅れ 物事の理解に時間がかかる 形の理解、空間の理解に遅れがある など 	<ul style="list-style-type: none"> 会話が成立しにくい 曖昧な表現、語用の理解などが苦手 言葉の発達の遅れ など 	<ul style="list-style-type: none"> 気持ちのコントロールが苦手 注意が続かない、衝動的に動いてしまう 何かにこだわること 新しい場面が苦手 など 	<ul style="list-style-type: none"> 他の人に合わせて行動することが苦手 共感性が乏しい 人の気持ちを察することが難しい など

b. 障害のある対象児・者に生じやすいライフステージの発達課題に関する特徴



発達期の課題が十分に習得されないことが、次の発達期の課題の習得に影響を与える

c. 障害のある子どもの発達課題の特徴に対する理解

- 各ライフステージでの発達課題の特徴は、対象児・者の特徴と環境が大きく関連している
- 発達課題での特徴の理解には、生活年齢と発達年齢の両方の視点が不可欠である
※生活年齢（いわゆる年齢）と発達年齢（発達検査などから算出される年齢で対象児の発達状態を示したもの）
- 各ライフステージでの発達課題の特徴が次の発達課題へ影響を与える

障害のある対象児・者の発達課題の特徴を理解することが支援につながる

① 乳児期の特徴

発達課題

- 空間を移動し、物を操作する基盤を形成
- 生理的安定
- 環境と物の理解の基盤を形成
- 人と関わる基盤づくり（愛着形成）

障害のある児・者に生じやすい発達課題の特徴

- 発達スピードのばらつき
- 生活リズムの問題
- 愛着形成の問題
- 感覚刺激に対する反応に特異性 など

困りごと

- なかなか泣き止まない
- すぐに起きてしまう
- 着替えやお風呂をすごく嫌がる
- 楽しめる遊びが定着しない
- 発達の遅れと不安 など

② 幼児期の特徴

発達課題

- 移動能力の完成
- 言葉とコミュニケーション
- 自我の芽生えと対人機能の発達
- 集団活動の準備
- ADLの自立

障害のある児・者に生じやすい発達課題の特徴

- 言葉の遅れ
- 不器用
- 対人機能の問題
- 集団適応の問題
- 身の回り動作の遅れ など

困りごと

- スプーンやお箸をうまく使えない
- 会話にならない
- 友達と一緒に遊ばない
- じっとしてられない など

③ 学童期の特徴

発達課題

- 運動技能の向上、行動範囲の拡大
- 論理的な思考、抽象的理解の獲得
- 仲間意識の深まり
- 自尊心、自己肯定感

障害のある児・者に生じやすい発達課題の特徴

- 不器用
- 教科学習の遅れ
- 集団適応、仲間意識の問題
- 自尊心の低さ など



困りごと

- 勉強に対する苦手意識
- コンパスやリコーダーなど、道具がうまく使えない
- 友達とのコミュニケーションが難しい
- 不登校
- 自己の否定的な捉え方 など

④ 青年期の特徴

発達課題

- アイデンティティの確立
- 身体の成熟と性への芽生え
- 友人、異性関係の深まり
- 進路、職業選択
- 社会の一員としての行動

障害のある児・者に生じやすい発達課題の特徴

- 不器用
- 教科学習の遅れ
- 集団適応、仲間意識の問題
- 自尊心の低さ など



困りごと

- 教科学習の遅れ
- 自己理解の難しさ
- 自己管理の難しさ
(身の回り動作の周辺課題の難しさ)
- 友達、異性とのトラブル
- 不登校、進路選択の問題 など

3. 各ライフステージでの発達課題と支援

対象となる子どもとその家族の現状を理解した上で

- 発達年齢にそった発達課題だけでなく、生活年齢の発達課題も理解した上で、支援目標を設定する
⇒対象児・者の生活環境を理解する
- ※学校など、対象児・者が生活する環境における課題や様子について情報を共有できる関係づくりが必要
- 次のライフステージを見据えて目標を設定し支援する
⇒成人期の支援につなげる
- 得意な力を生かして、苦手な力をサポートして成功体験につなげる（自己を信頼する支援）
⇒対象児・者の特徴を理解する

a. ライフステージにそった支援のポイント

◆対象児・者を理解する

対象児・者の特徴だけでなく、発達課題と環境を把握し、その変化を理解する

◆活動と環境の活用

対象児・者の特徴で強みを活用し、安全・安心を提供できる環境を整備する

◆支援者の役割を再確認する

支援者間でライフステージを理解した役割を再確認し、役割にそった対応の振り返りを行う

b. ライフステージにおける支援

乳児期：安全と安定感・たくましい心と体

健全な生活習慣の確立と子どもと家族の安心感へ

▶支援のポイント

- 母子関係の確立
 - ⇒保護者に対する支援が不可欠
- 生活リズムの安定（睡眠、食事）

▶具体的な対応

- 安心できる関わりや環境を見つける
- 自分の身体を支える、姿勢を変えるなどの運動遊びなどの提供
- 子どもからの反応を慌てずに見守り、対応する
 - 保護者の関わりでグッドポイントを共に確認する など

幼児期：愛情と所属感（相互信頼）、外界との交流

安心できる環境でたくましく育った身体を基盤にして

▶支援のポイント

- 身の回り動作の自律
 - 食事、更衣、排泄動作の自律に向けた支援
- 集団適応
 - 家庭以外での集団に安心して参加できるような支援

※家庭が基地（安心な場所）となることが不可欠

▶具体的な対応

- 身の回り動作への支援は、「子どもが興味を示していること」「今できていることから広げていくこと」が重要
 - ※ 補助具や模擬的な遊びなども活用する
- 場面や活動に対する説明や予告、目印などの活用
- 楽しめる、好きな活動の把握と提供
- 家庭と家庭以外での様子が異なることを理解する など

学童期：自尊心・自己理解、他者から認められること

安心できる場所の獲得と、外界との交流により得られた所属感を基盤にして

- 支援のポイント
 - 教科学習に対する支援
 - 強みと弱みの把握
 - 活動範囲の拡大
 - 役割の獲得：他者から認められる体験へ
 - ⇒成功体験につなげる
 - 自己肯定感

➤具体的な対応

- 教科学習に対する支援では、強みを活用して成功体験につなげる
 - ※補助具の活用や細かな段階づけ、支援のステップ（一緒にやってみる⇒お手本をやってみせる⇒言葉などで説明する）を工夫する
- 活動範囲を拡大しての体験では、
 - 準備（計画、予告）⇒活動体験⇒振り返りを行い、次の活動につなげる
 - ※反省ではなく、うまくできたことも必ず共有する
- できるだけ失敗で終わらずに、子ども自身が主体的に成功できるように支援する
 - など

青年期：自己実現・自己有能感

自尊心・自己理解、他者から認められた体験を基盤にして

➤支援のポイントと対応

・自己理解

自己の特徴を活動を通して振り返り、他者と共有することで、自己理解を支援する

・ソーシャルスキル

自己理解と並行して、感情のコントロール、相談できるスキル、問題解決のスキルなどの獲得を支援する

当事者の特徴からどのような伝え方が有効かなどを事前に検討した上で、模擬的または類似した場面を活用し、当事者にあった方法で具体的に支援する

・友人、異性との関係に関して

以下の点について、当事者に伝わりやすい工夫をして繰り返し伝えることが大切

◆当事者の視点（当事者なりの理由）、他者の視点（どのように捉えられてしまうのかなど）について説明する

◆モデルの提示（どうしたらよいか）と解説（なぜそのような対策が必要か）する

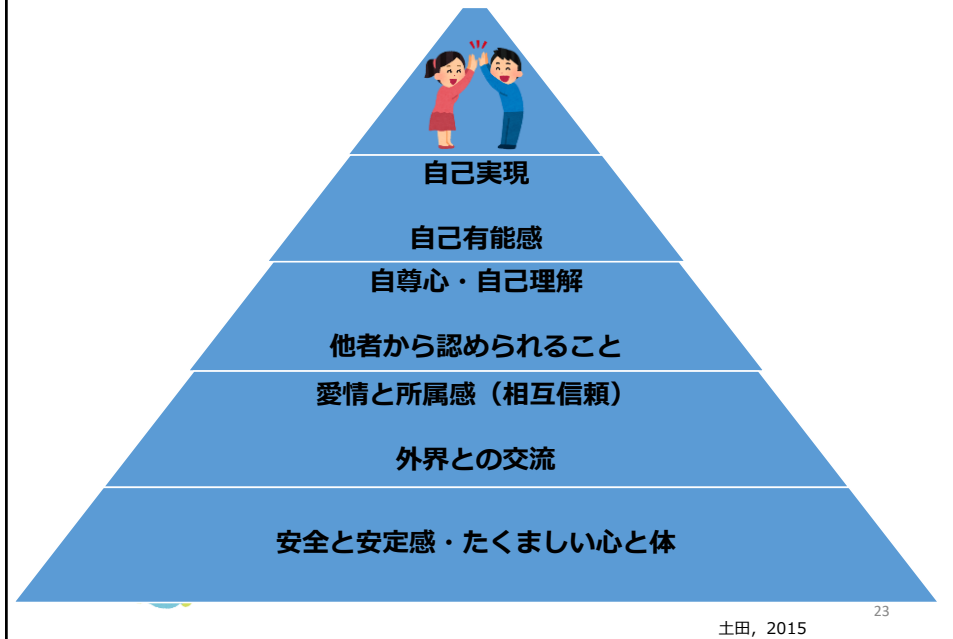
◆代替案の検討

・余暇活動に対する支援

生活リズムとストレスへの対処につながる余暇活動の提案と体験

※当事者の強みを活用して、好きな活動につなげる

ライフステージにおける支援（まとめ）



c. 成人期への橋渡しとして

- 当事者本人が主体的に生活できるように支援する（自己決定の重要性）

⇒支援者は「力を貸して助ける」

- 自尊心の回復を支援する

⇒失敗体験や認められない体験から成功体験へ

- 自己理解（自分の傾向を多角的に捉える）を支援する

⇒まあまあいけてる自分に気づく

- 社会の中での居場所（ベストでなくてもいい、ベターでいい場所）を見つける支援

⇒発達課題を強みに使う

最後に

- 子どもはどんな風に大人になるか、を考えてみましょう
- 大人になっていく過程で、どんな風に寄り添っていくことが必要か、一人一人の子どもで考えてみましょう
- どうしたら、大人になっていく過程によりそうことができるか、みんなで考えてみましょう

考えたら、できることから
やってみましょう!